

第11回定例会意見交換から（1年間を振り返って、会の今後の在り方について）

今後も勉強が必要

- ・原子力・プルサーマルには批判的だったが、勉強させていただき、原子力に近づいたと感じたが、発言するためにはもっと勉強が必要と思った。
- ・会員の知識にばらつきがあり、進め方をもう少し工夫を。
- ・仕事が忙しく、会への出席時間帯だけが、唯一会員でいられるような状況。もう少し会員が勉強できるような会合があっても良い。
- ・視察に行って現場を実際に見ることは大事と感じた。住民にも見てもらうことが大事。

会の在り方・存在意義

- ・今までは原子力の激しい動きに振り回されたが、これからは会として今後何をすべきかをじっくり議論していければと思う。
- ・会を通じての情報公開、詳しい話を聴き、人の意見も聴けて有意義だった。
- ・安全性が高まる、役に立つ提言をまとめることができればと思う。
- ・問題が次々と起きてきた今までは会の存在意義も感じられたが、運転再開すると会の存在が発揮できるか疑問。東電も昔のようにガードを固くしてしまうのではと心配。そのためにも提言や統一的な見解が出せればと思う。
- ・会の権威が高まるのは、会への説明で地元住民への説明が済んだと利用され、良くない。会は安全運転を淡々とチェックする地道な活動で良い。
- ・会が東電、国に次ぐPR機関という批判がある。東電の説明会では地域の会への情報提供がPR材料にもなっている。
- ・地域がお互いに尊重しあいながら、透明性確保、監視する役割をどう担うかは重い課題。
- ・運転再開を前に国が廃棄物問題で点検するなど会としての1年間の成果はあったと思う。
- ・この会に対して事業者が気を遣うことで、会があることだけでも良いと思う。

開催頻度

- ・毎月開催は負担であり疑問。2～3ヶ月に1回か必要な時に開催で良いのでは。

情報提供の工夫を

- ・市民が理解しやすいよう通訳・広報官として自分たちが活動できれば。
- ・会の議論が余り住民に届いていない。情報誌の存在を知らない人、中をほとんど読まない人が多い。所属団体に報告すると共に地域の人の考えを吸い上げることが必要。

国・自治体・東電への意見・要望

- ・先日、福井でプルサーマル計画再開という記事があったが、今の保安院の体制で計画再開されたら大変。会でも色々な問題提起・率直な意見を出し、地元の声を国に聞いてもらいたい。
- ・原子力安全委員会の市民懇談会という国民・住民の声を聞く会があるが、その場で出た意見だけが広聴されるということであり、おかしいと思った。例えば、刈羽住民投票の声などは委員の耳に届くはずだが、そういうものは政策に反映されてない。国民・住民の声を聞き取ろうとする国の委員にこの場で議論されているようなことがどれだけ届いているのか、いつかは直に聞いてもらいたい。
- ・保安院はもっと前に出て地域住民に安心の部分の説明をお願いしたい。
- ・この1年間、東電も我々も大変勉強になった。保安院の対応も当初のただ説明に来たのとは大きく変わった。ただ、国の担当者は苦勞し、一生懸命やっているが、国は本当にエネルギー政策の一つとして重要視しているのか疑問に思った1年。
- ・住民の不信感が払拭されないのには自治体にも責任があり、厳しい自己反省が必要。